

SGS 淡路食農宿泊研修記録

報告者：高尾 豊紀、石原 清、南部 ユリ子(名簿掲載順)

研修日程：平成 29 年 11 月 29 日～30 日

研修参加者：保田学長以下、前期・後期生を含め総勢 51 名

研修先：初日①あわじ花さじき②杉本林業株式会社③あわじメガソーラー④伊弉諾神宮⑤淡路市生穂漁港⑥武田食品冷凍㈱

二日目⑦淡路県民局洲本農林水産振興事務所⑧淡路島牛乳工場⑨淡路島観光牧場⑩淡路農業技術センター

特別講演：淡路の女性農家 小峰様、石田様「淡路島玉ねぎ有機栽培について」

1.はじめに

本報告は高尾が写真撮影を専任したほかは、報告者三人による研修での感想を話し合った事柄を基に筆者が取りまとめた。限られた時間内にかなりの数を廻ったので、印象深いものとそうでないものがある。当然ながら印象深いモノに多くの紙幅を費やした。なお、印象深いか、否かは、我らの主観的判断に基づくものであること、これらを予めお断り申し上げ、ご容赦願う次第である。報告は時系列に沿って行う。

2、本論

①「霧の摩周湖」か？ はたまた「霧のあわじ花さじき」と言うべきか？

研修、それは幻想的な濃霧から始まった。淡路島北部に位置する「あわじ花さじき」好天気ならば、明石海峡と大阪湾を背景に広大な(約 15ha)お花畑の大パノラマを堪能できるはずであった。しかし、無情にも花さじき周辺一帯は、「霧の摩周湖」ならぬ「霧の花さじき」と化していた。濃霧できりぎり舞いさせられるほど視界は悪く、遠方の様子は言うに及ばず、ほんの 10m 前方さえ見えなかったほどである。こんな時、「畜生、残念」と大半の人は悔やむであろうが、物事はポジティブに捉えるべきである。

「ロマンチックでええじゃないか」と言った御仁がいた。他ならぬ保田学長である。そこで得た教訓、ネガティブな思考からは前に進まない。常にポジティブ思考で行こう！

②杉本林業株式会社 ～竹の猛威に果敢に立ち向かうパイオニア～

全国の里山で共通の問題点の一つに竹の侵入がある。同社の説明によれば、淡路島も例外ではなく、30 年前に比べて竹林の占める面積は 6 倍、270ha、島の面積の 5%を占める。全国平均より深刻な状況にある。解決に一条の灯を見出したのが同社による快竹プロジェクト？ である。リフォーム(改築)にヒントを得た快竹か？ と考えるのは早計である。

竹は成長力が植物界で No.1 を誇る。それだけに他の植物に与える影響は大きい。即ち、竹が繁茂し、放置すると最終的には竹に占有され他の植物は途絶えてしまう。それ故、竹の

猛威を抑えるのは里山管理には喫緊の課題である。竹の用途は竹帚、竹ひご、竹炭、土壁を作る際の材料とか、竹竿等に供せられるが、いずれもその需要は年々勢力を増す竹の供給力に比べれば微々たるものである。そこで、この会社が開発したのが、竹を細断、パウダー状にして家畜の飼料や土壌改良材、更には野菜作りの肥料の他、チップにしてバイオマス発電に利用する、という画期的なものである。竹は予想以上に火力が強く、日本製の炉を傷めるので、その分野で先駆的な技術を有するヨーロッパ製の炉を使用している。なお、パウダー状にしたものは、ペットの飼料にも供せられる。現在、このパウダーを飼料以外に淡路島の地場産業である線香の原料にできないか、研究中である。これが実用化されると、竹の猛威に悩む全国の里山に明るい希望を与えるのは必至と期待される。

問題点、課題は山積しておりコストパフォーマンスからしても、現状では自治体等の補助金に頼る部分が多いのが難点。

(参考資料 「竹のちから 竹元気」 杉本商店パンフから)

③淡路市メガソーラー ～課題の多い自然再生エネルギー～

淡路市の温暖で降水量の少ない気候特性(瀬戸内海気候)を利用して自然再生エネルギーで地球に優しい発電供給体制を作る。同市の東海岸に 50kw の太陽光発電施設を及び西海岸に 600kw の風力発電施設を設置している。この他市内の中学校 10 箇所に太陽光発電施設を設置済み。その他、兵庫県企業庁所有地(約 1.5ha)を無償で借り受け(20年)840kw の設備容量がある。市役所庁舎、防災安心センター屋上等と前述の兵庫県企業庁分を含め計 1000kw の事業規模である。

太陽光発電は設置費が多額で初期投資が大きい、売電は電力会社の買取価格に左右される、季節や天候等によって安定的な電力供給に難があるなどの欠点は従前から指摘あり。ここでの説明ではさらに台風等による塩害、鳥(カラスなど)による石の落下によるパネルの破損、敷地内の雑草刈を適切に行うなど日頃のメンテナンスが必要と再認識した。

(出典：淡路市作成のパンフレット「淡路メガソーラー」)

④伊弉諾神宮 日本遺産認定 国生みの島、淡路の大元である。古事記、日本書紀に記載あり。日本で指折りの歴史を誇る。

⑤淡路市生穂漁港での魚のセリを見学する予定であったが、濃霧による視界不良で当日の漁が実施されず、よってセリは不成立で狙いのセリ見学はできず。現場に行ったのみ。

⑥武田食品冷凍㈱ ～厄介モノをヒット商品に、アイデアマン社長奮戦す！～

淡路島周辺の海は下水道の整備等で川から流れ込む水の浄化が進み、格段に海もきれいになった。ただ、それとは裏腹に海の貧栄養が原因でノリ養殖のノリの色落ち問題や魚の生息が減った。近年ではイカナゴの不漁が憂慮されている。その他、近海で獲れるサメ、エイが地元の漁業者にとって厄介な存在である。網は傷める、獲れても売りモノにならない、他の稚魚を食害する等でまさに産業廃棄物そのものであった。それを何とか有効利用できないか、と立ち上がったのが同社である。ご承知のようにサメ、エイの仲間は原始的な軟骨魚類で、武田社長によれば本来は美味しい魚だが、魚肉は 7℃以上になるとアンモニア臭を発生

し不味くなる。魚の加工には軟水が最適であり、これを利用すればアンモニア臭を防ぐことができる」と確信していた。その結果、サメ、エイの干物商品化に成功し、高価格のペットフードとして売り込む戦略が旺盛な需要に支えられ、傾きかけていた同社の経営を立て直した。さらに漁業者にも仕事を続ける意欲を与えるなど「正のスパイラル」をもたらした。タダ同然の材料を素に大きな収益を得た同社は、地元の漁業者にも喜ばれている。

ところで、同社パンフによればサメ、エイの効能として骨・軟骨・関節に効くとあり、消費者の需要を次々と喚起する PR 上手なアイデアマン社長の快進撃が続く。

結論：これまで産業廃棄物として捨てられていたサメ・エイを有効活用し、自社の経営再建はもとより、地元漁業者のヤル気を取り戻し町おこしの起爆剤にもなり、厄介モノを有効利用する循環システムが構築できた意義は大きい。

⑦淡路県民局洲本農林水産振興事務所 パワーポイント(以下「PP」と言う)及びパンフに使用して淡路の農業の現状についてのデータを基に副所長による説明があった。

⑧淡路島牛乳工場 ～万全な検査と地道な配管洗浄の実施が安全・衛生を死守～

淡路島酪農農業協同組合から淡路島牛乳株式会社へと組織改変。PP による生乳から商品となる牛乳になるまでの過程の説明を受けた。製品となり商品として売られるまで数回にも及ぶ検査を経て出荷されることを理解した。同社では牛乳、コーヒー牛乳及び焼きプリン³の3つを商品として出荷しておりチーズは生産していない。この工場では牛乳等の製造が終了すると同時に並行して配管設備のパイプ洗浄が毎日継続して行われる。先年、この作業を怠ったことが公にされ、社会問題となり某乳業大手メーカーが社運を傾けたのは記憶に新しい(15期生：松岡談)。昨今、同様に某大手製鉄会社のずさんな内部検査等に端を発した企業の不正な経営姿勢が続々と明るみになった。これが「技術立国日本」の将来に暗雲をもたらすのは嘆かわしい限りである。ここでは製品の焼きプリンを賞味した。美味しかった。

⑨淡路島(観光)牧場 ～観光牧場の動物たちの様子を垣間見て～

ホルスタイン種の乳牛と仔馬(ポニー種)が柵内に飼われているのを見学したが、正直言って非常に劣悪な環境下に置かれているのにショックを覚えた。筆者は以前北海道の広大な牧場で良好な飼育環境のもとに牛馬が牧草を食べて健やかに育っているのを見学したのを覚えている。それとの落差があまりにも大きかった。即ち、ここで飼われている牛馬の場所は非常に狭い。ろくに牧草もなく、特にホルスタインのいる牛舎前の広場は泥んこ状でぬかるみだらけの有様だ。そこに牛糞などが放置されている? のか、悪臭を放っている。こんな衛生状態なので、11月末日と言うのにハエが牛の周りを飛び交っている。

まさか、ここで生乳の搾乳をするとは思われないが? もし、行われているとしたらこのような飼育環境での生乳から作られた牛乳は飲む気がしない、と言うのが正直な感想である。壁に打ち張られた波状のトタンも外れかかっているものが散見された。牛舎にはモーツァルトの曲が流れていたが、ほぼ真っ暗な様相であった。人懐こい子牛の目を見たら、もっと牛馬の飼育環境を改善してやってほしい、と願わずにはいられなかった。

⑩淡路農業技術センター 同センターの概要等詳細は当日配布のカラー刷りパンフ参照

ここでは花卉及び野菜の品種改良等事業を行い、それらの部門の生産者に同事業の成果、及び実験栽培の途中経過などの詳細なデータを公表し、生産者の技術・知識のスキルアップを図り、ひいては農家経営、農家所得の向上に貢献するものである。

現場の施設栽培のカーネーションの圃場を見学したが、驚いたのはそこでの連作障害が発生していないことだった。しかも38年の長期である。連作障害を防止できた理由は蒸気消毒(90℃～95℃で30分間)にある。灌水や液肥はチューブを使って省力化。その他、エアコンによる適正な温度管理などが、栽培の成否に大きく影響する。新品種として確立できるのは一年間で僅か1品種。残りの129品種はボツになる現実に我ら全員驚くことしきり。

同センターを出て、一般農家の玉ねぎの圃場を見学した。そこでは淡路島農業の農家経営が水稻栽培プラス野菜栽培等の栽培で農地の有効活用を図る、二毛作、三毛作のなされる仕組みの講義を受ける。淡路の酪農(及び畜産)農家の協力による堆肥供給で、二毛作や三毛作による地力を回復させるシステムが昔からあったことが判明した。

また、フェロモントラップを使って害虫の発生時期、即ち発生のピーク時とオフピーク時を調査し、農薬散布の適正時期を把握し、効果的な農薬使用をすることも分かった。

玉ねぎ栽培では、最近の農家はポット苗を利用して機械化で省力化を図る方向にシフトするが、高齢農業者は伝統的な手植えも行っている現実を知った。

3.特別講演 「淡路玉ねぎの有機栽培について」 淡路の女性農家、小峰様と石田様が発表。

保田先生の有機栽培農業塾に入塾して以来7年間、先生の指導・薫陶を受け「保田ぼかし」を使った有機農法の玉ねぎ栽培を実践。ご両人は、これからも有機農法を積極的に推進するとの力強い表明あり。有機農法は地道な土づくりが基本であり、一般的には即効的な効果は認め難いと言われるだけに、導入するには勇気がいる。有機農法は「勇気」農法と言われる？ 所以である。「農薬散布をしないので害虫が増える」との苦情、無理解な近隣農家との軋轢もあろう。そんな中で初志貫徹、有機栽培を継続するには「安心・安全な食べ物で美味しい」本物(の農産物)づくりに貢献するのだという強い自負をお持ちなのであろう。

4.番外編 初日の晩の懇親・演芸会

我ら15期生は内藤・寺本組によるマジックショーで華やかなスタートを切り、次いで高尾リーダー、石井副リーダーに倣って全員参加の手話ソングを披露した。手話は難しい、とつくづく感じた。先輩方も民謡に合わせた踊り等、大いに座を沸かせ、楽しいひとときはあっという間に過ぎ去り、充実した研修だった。芸達者な人が多いSGS懇親会だった。

5.おわりに

独りよがりでとりとめのない報告は読みづらかったかと推察しますが、ご容赦下さい。精確を期すために、研修先で入手した資料で拙稿の不備、誤り等を確認し、ご指摘願います。

(文責 15期生：石原)